

身体装飾をめぐる 子ども・大人・社会の交渉

風戸真理

<要旨>

本論では、装い（ドレス）の中でもとくに装飾機能の強い身体装飾に焦点を当て、日本の女性の子どもがおこなう身体装飾の時間変化、その過程で直面する葛藤、そしてやがて大人になった女性の身体装飾と社会の関係を記述した。その上で、身体装飾に関する子ども・大人・社会の交渉と、審美性をめぐる規範・流行・便宜について考察した。なお身体装飾は、アクセサリーの着用、身体彩色（化粧）、身体変工（ピアス、タトゥーなど）の3つに分類した。

結果としては、第一に、現代日本の子どもの身体装飾は学校という制度の中で、化粧を端緒として開始されていた。そこでは審美性や娯楽性ととともに、校則への抵抗、教師との交渉、仲間との同調や差異化などの社会関係が重視されていた。第二に、身体装飾は学校・アルバイト・就職活動・親との関係において抑制されていた。とくに身体変工をめぐるのは、外的な抑制、内的な抑制、身体的な困難が葛藤要因となっていた。第三に、大人の身体装飾と社会との関係については、流行歌の歌詞を分析した結果、最も日本社会に親和的なのは身体彩色であったが、ピアスやタトゥーに関しても豊かな表現が見られた。アクセサリーを外す行為は私的な親密さを帯びた身体の出現を示し、装身具には公私をスイッチングする道具としての機能が認められた。

審美性の観点から、身体装飾をめぐる規範・流行・便宜の関係について検討すると次のことがいえるだろう。人びとは環境とのすり合わせにより社会適応的な装身の輪郭を探り、その範囲内で他者との差異化を図ったり、流行に同調したりすることをおしゃれとして楽しんでいた。また、身体変工には逸脱を含む多様な意味づけがなされていたが、身体の審美的価値を効率的に高めるために、身体変工の実利性、便宜性が評価される側面もみいだされた。

347

1 はじめに

1-1 身体装飾という装い

本論は、装いの中でもとくに装飾機能の強い身体装飾に焦点を当て、日本の女性の子どもおこなう身体装飾の時間変化、その過程で直面する葛藤、そしてやがて大人になった女性の身体装飾と社会との関係を記述する。その上で、身体装飾に関する子ども・大人・社会の交渉と、審美性をめぐる規範・流行・便宜の関係を考察する。

装いは、衣服・髪型・身体装飾の3つによって構成されるが〔ロス 2016: 7-8〕、本論ではこれらをまとめて「ドレス」(dress)とよぶ。衣服の機能としてロバート・ロスは、身体の(自然・社会的)保護、装飾による他者の視線操作、自身の属性や見解の表明を挙げているが〔ロス 2016: 9〕、身体の自然的保護を除けばこれらはドレス全般に敷衍できるだろう。ただし、これらが実際にどのように表現され、どれに重心が置かれるかは地域・社会ごとに異なり、また、ドレスが流行と結びつくことで時間とともに変化する。流行は模倣と個別化への欲求により交代する社会現象である〔ジンメル 1994: 32-34〕。

本論では身体装飾を「体毛を含む広義の皮膚に対する文化的な介入」と定義し、これを身体への介入方法により「装身具」、「身体彩色しんたいさいしき」、「身体変工」の3つに分ける。これらは一部重複する範疇であり、その代表が「身体変工をとまなう装身具」という両義性をもつピアスである〔雪村 2005: 139〕。ピアスは、身体変工の結果として形成された「ピアスホール」に挿入する装身具(モノ)であるが、これを着装するためには先だって「ピアッシング」とよばれる身体に穴を開ける身体変工行為がおこなわれている必要がある。本論ではピアスを身体変工に分類する。

人類学は未開社会の身体彩色と身体変工に着眼してきた。身体彩色は可塑性と娯楽性が強いが、身体変工は不可逆的で痛みをとまなう。身体変工はその不可逆性ゆえに、「身体に、象徴的な役割を書き込み」「身体を(原始)共同体の支配的な規範へ従属させる」〔大澤 2013: 108-109〕行為として意味づけられてきた。

これに対して大宗教は身体変工を規制した。『旧約聖書』の「レビ記」には「死者を悼んで身を傷ついたり、入れ墨をしてはならない。わたしは主である」(19章28節)とあり、異教の儀礼的な自傷や入れ墨といった身体変工を戒めている。「レビ記」はユダヤ教とキリスト教の聖典であり、イスラム教の啓典である。他方で、孔子(B.C.552～B.C.479)を教祖とする儒教の一経書のである『孝経』の「開宗名義章第一」には、「身体髪膚 受之父母 不敢毀傷 孝之始也」という節がある〔武内・坂本(曾子) 1988: 18-19〕。身体・頭髪・皮膚は父母からもらったもので、これを傷つけないことが親孝行の第一歩である、と解釈できるだろう。儒教の影響下にある日本では、近世から近代にかけて入れ墨が「鯨刑」とよばれる刑罰として用いられる(1720～1870年)一方で、一般社会では入れ墨が禁止され、アイヌ特有の「耳金」「耳輪」(現在のピアス)も野蛮な風俗として禁止された〔百瀬 2008: 151, 179〕。このように、文字の案出ないしは近代社会の成立以降の世界では、身体は変工なしの状態であることが標準的なものとされてきたのである〔大澤 2013: 88-89, 108〕。

現代社会における身体装飾の展開については、ジュディット・エプシュタインがフラン

スにおける入れ墨と化粧の社会的位置を比較している。20世紀のパリの入れ墨店の客はほとんど男性で、彫られる図柄は暴力性・周縁性・性的欲望を示し、「規範の侵犯」というコノテーションをもっていた。これに対して化粧は主に女性によっておこなわれ、日常的な化粧は規範化された記号を顔に集中させるものであり、社会性の印であった〔エプシュタイン 1986: 297-305〕。〈身体変工=逸脱〉〈身体彩色=秩序〉という図式は現代日本にもあてはまる。一部の若者は西欧風のタトゥーに興味をもつが、入れ墨全般は日本では受容されているとはいえない¹。

現代日本の女性による身体装飾の実践や意識については、主に女子大学生を対象としたアンケート調査による社会学・心理学的な研究がある〔村澤・阿保 2001; 金 2006; 橋本・内藤 2007; 深田・梶本 2014; 栗田 2016〕。装身具については、衣服よりも手軽にコーディネート印象を変えることのできる道具として用いられていることが指摘されている²〔橋本・内藤 2007〕。

身体彩色については、化粧をする理由の第一として「社会の常識（女性の身だしなみ）」を挙げる調査結果がある一方で〔深田・梶本 2014〕、化粧品の種類別の利用頻度調査からは、2013年時点において、口元などのパーツを彩色するポイント・カラーリング時代から、顔全体の色調・濃淡・明暗を総合調整するトーン時代へのシフトが指摘されている〔栗田 2016〕。化粧には規範性とともなう審美性や流行が見られるのである。

身体変工として日本で普及しているのはピアスである。首都圏在住の女性910人（15～64歳）においては、1991～2001年の10年でピアス装着者が17%から33%へ倍増しており、その中心は16～34歳の若年層であった〔村澤・阿保 2001〕。金愛慶による2004年の東京都小平市の大学生調査では、対象者285人（9割が女性）の半数以上がピアッシング経験者であった。彼らは、「ピアスは着けている時よりも、開ける時の方が楽しい」「精神的な高まりが得られる」と述べ、審美性よりもピアスホールを形成することによる内面的・呪術的な変化を重視していた。また、5個以上のピアスホールをもつ者は自傷に親和的であった〔金 2006〕。

以上から、装身具は審美性の向上を目的として毎日選んでは着脱する使い方がなされていた。身体彩色としての化粧には規範性や義務性とともなう、審美性にもとづく流行が認められた。身体変工については、タトゥーや入れ墨は社会での受容度が低いながら、ピアスは1990年代以降に急速に普及していた³。ただし、ピアッシング経験者たちは審美性よりも「実存的

1 大阪市が市職員に対しておこなった入れ墨調査（2012年）の是非を問う一連の裁判（2014～2016年）では、他人から入れ墨を見せられないように配慮することの社会的相当性が示された〔田中 2016〕。また、入れ墨やタトゥーは主に彫り師によって施されてきたが、2015年、これが医業とみなされて彫り師が医師法違反で略式起訴された〔朝日新聞 2015〕。

2 人類学や民族芸術学は装身具の機能として審美性の他に、信仰と呪術〔露木 2011: 12-14〕、価値の保存機能〔風戸 2010: 12; 露木 2011: 12-14〕、集団外部に対するアイデンティティの表明〔露木 2011: 12-14〕、集団内部での個人の社会的位置の表示〔中村 2000: 6-7〕、集団の連続性の象徴〔風戸 2010: 12〕などを示してきた。

3 古代日本ではピアスが用いられたが、7世紀以降には見られなくなった〔露木 2008: 32-38〕。明治期以降、戦前期までにほとんどの西洋式アクセサリが取り入れられたが、耳につけるアクセサリの普及は遅れた〔関 2008: 143〕。ピアスが新聞・雑誌に登場したのは1972年であり、ピアッシング行為は導入初期には危険な逸脱とみなされたが、穿孔技術の確立とともに社会に受容された〔雪村 2005〕。

な感覚」[大澤 2013:109] を重視しており、自傷との連関という逸脱要素も見られた。

1-2 子どもから大人へ

次に、子どもから大人への移行に関する人類学的な先行研究および日本の制度を検討したい。現代日本では「二十歳」になることが大人になることを象徴するが、子どもから大人への移行は現実にも法的にも漸次的である。法律上の端緒は満14歳で「刑法」による刑事責任を課せられる時といえるだろう。しかし、17歳までは「児童福祉法」「労働基準法」等により児童・年少者として保護される。18歳になると選挙権を付与されるが、19歳までは「少年法」の定める少年として守られた後、満20歳で公に成人となる。

人類学は、子どもから大人への変化をはじめとする人の社会的カテゴリー移動を、通過儀礼に注目して説明してきた。アルノルト・ファン・ヘネップは、人の状態の変化や社会的位置の移動にさいしておこなわれる通過儀礼のプロセスを、分離・過渡・統合の3つに区分した。そして、子どもの成人儀礼にともなう割礼や身体毀損といった身体変工について、身体に傷をつけることは集団の印を終生身につけることであると意味づけた [ファン・ヘネップ 2012: 22, 97, 101]。

小川了はセネガルのフルベ社会（ジェンゲルベ村）の成人儀礼と比較して、日本の学校制度を成人儀礼における隔離期間にあたるものであると論じた。フルベ社会では10～12歳の少年が約1カ月間の成人儀礼を受けて大人になるが、儀礼の間、少年たちは隔離され、割礼という激痛をともなう身体変工を中心に、集団生活・同じドレス・共食・自社会についての学び等が課せられ、そして、これらの試練の後で社会に統合される。現代日本社会では学校という制度が成人儀礼の代わりを果たすが、隔離期間が長くなり、劇的な要素は薄められているといえる [小川 2013: 172-179]。

日本における高等学校（以下、高校とする）進学率は2017年5月現在で98.8%である [文部科学省 2017]。つまり、日本の子どもは12年間に渡る学校経験を通して、隔離・集団生活・同じドレス・共食・自社会についての学び・試練を経験しているのである。

1-3 本論の視座

現代日本の身体装飾に関する既存研究は主にアンケート調査に依拠しており、身体装飾をおこなう個人の視点や、個人がおこなう身体装飾の通時的な変化は不明であった。そこで本論では個人に注目し、個人が装身具・身体彩色・身体変工を開始し、おこなってきたプロセスを記述する。

ピアスに関しては、新聞・雑誌というメディアでの取りあげられ方を分析して、日本社会での普及過程を明らかにした雪村まゆみの研究があるが [雪村 2005]、対象がピアスのみで、視角が社会問題に限定されていた。これに対して本論は、身体装飾全般に関して審美性や娯楽性を中心とした言説を扱うことを目的として、流行歌の歌詞に表現される身体装飾についての分析をおこなう。

子どもから大人への移行については、小川 [2013] の議論を受けて、学校という制度を「弛緩した通過儀礼」とみなす。学校には割礼のような劇的なイベントがなく、ある

表1 身体装飾の装飾行為と時間による分類

装身方法	着装物または介入行為
身体への介入 時間	
着装	アクセサリ、カラーコンタクトレンズ、衣服とその付属品
彩色	化粧、ネイルアート
変工	半永久 タトゥー、ピアッシング、永久脱毛、美容形成
	中期 毛染め、パーマネントカール、縮毛矯正やストレートパーマ、散髪、剃髪、毛抜き、まつげパーマ、日焼けサロンでの皮膚変色
	短期 ドライヤー等による髪への加工、髪結い、ビューラーによるまつげのカール

のは弛緩した長期間の隔離である。子どもはやがて高校を卒業して校則によるドレス規制から自由になり、すると子ども／大人の対立は、徐々に個人／社会の関係に移行していく。個人と社会の関係については、清水昭俊 [1989] が提起した、身体其自然性と文化性を対立軸とした社会の二重分節論に依拠する。家は子どもにとって「家内的領域」であり、学校は「公的領域」である。前者は身体等のより自然に近い部分を、公的領域は社会のより規範的な部分を包摂するものとして相対的に位置づけられる [清水 1989: 9-60]。

本論では20歳未満の者を「子ども」とし、その中でも短期大学生を含む大学生を「大学生」とよぶ。ジェンダーに関しては年齢に関係なく「女性」とする。

身体装飾の分類としては、身体への介入（着装・身体彩色・身体変工）と時間（半永久的・中期・短期）に注目し、個々の着装物または介入行為を表1のように分類した⁴。本論で主に扱う身体装飾は、アクセサリの着装、身体彩色である化粧、身体変工であるピアッシングとタトゥーである。

本論が主に依拠するデータは以下の3つである。第一に、子ども個人の身体装飾の時間変化を明らかにするために、北海道札幌市にある北星学園大学短期大学部⁵の卒業論文として提出された下島里緒の「肌の装飾人生——若者はどうオシャレを利用しているのか——」 [下島 2017: 196-200] を資料として分析した。この論文は身体装飾に関して、20歳の下島が自身および同世代の親しい友人の経験を記述し、筆者がゼミ担当教員として執筆を指導したものである。第二に、日本社会全体の身体装飾に関する風俗を検討するため、流行歌の歌詞に表されたアクセサリ関連語彙を分析した。第三に、大人の女性のアクセサリの使用方法を参与観察した。

論文の構成としては、続く第2章で子どもの身体彩色と身体変工の開始および時間変化

4 髪や皮膚に色素を浸透・沈着させる身体介入を身体変工とし（タトゥーや毛染め）、皮膚の上に物質を塗ったり除去したりするものを身体彩色（化粧やネイルアート）として区別した。

5 北星学園大学短期大学部（学生数約490人、2017年現在）は北海道札幌市（人口196万人、同左）にある教養系の短期大学である。男子学生は少ないが、男女共学である。

を記述する。第3章では身体変工に関わる葛藤を分析し、第4章では日本社会における身体装飾の位置づけを示すため、流行歌に表された身体装飾と、大人の女性の身体装飾とのつきあい方について検討する。第5章では、身体装飾をめぐる子ども・大人・社会の交渉のあり方と、そこに規範・流行・便宜がどのように関与しているのかを審美性の観点から考察する。

2 子どもの身体彩色と身体変工

2-1 開始時期

日本の子どもは小・中・高・大学といった学齢期を通して徐々に身体装飾を取り入れる。本節では、下島に依拠して、子どもが身体装飾を開始する時期について身体彩色と身体変工を比較しながら記述する。下島が所属する生活文化履修モデルには2016年12月現在、本人以外に15人の2年生メンバー（以下、ゼミメンバーとする）がいた。

下島によれば、化粧については全員が、ピアッシングは10人が、大学2年次の冬までに経験していた。化粧の開始年齢は12～19歳で、とくに16歳と18歳で増えていた。ピアッシングは、早い者は14歳で、5人が18歳でおこなっていた。16歳は高校1～2年次、18歳は大学入学の年にあたることから、下島はこれらを学校で区分される「区切りの年」と捉え、自身を「大人だと感じ出す時期」と意味づけている。

ゼミメンバーが化粧で目指しているのは、自分の好きな、なりたいと思う顔を真似ることであった。一方、ピアッシングをおこなった理由としては、ピアスへの憧れ、仲間が穴を開けた、開けると世界が変わると聞いた、ピアスの方がデザインがかわいい、などが挙げられた〔下島2017:197-198〕。

子どもは上級学校に進学したさいに、各自の判断で身体装飾を取り入れる。これは子どもによる大人宣言としてのドレスである。しかし、多くの中学・高校は化粧やピアスを校則等により禁止・抑制しており、子どもの身体装飾はインフォーマルなものと位置づけられる。子どもが認識する大人への移行の区分は、大人とは必ずしも共有されていないのである。

これに対して大学は一般に、学則等でドレスを規定していない。子どもにとって大学生活は、小学校入学以来はじめて、公的領域において身体装飾を抑制されない機会として経験されるのである。大学生は、大学に入学してまもなく身体装飾に関する試行錯誤を始める。

すべてのゼミメンバーが受容していた化粧は、登校前に自身の顔に彩色を施し、帰宅時に洗い落とすという一日サイクルの装身である。就職活動を控えた女性の大学生には、キャリア形成教育等で化粧の指導がおこなわれる。大学生は化粧を自由に楽しめるようになると同時に、これを社会の規範として押しつけられるのである。

ピアッシングについては、子どもの関心は主に自身の身体に穴を開ける、身体を変工する行為そのものに向けられていたが、イヤリングと比較しながらピアスのデザインを評価

する意見もあった。ここで、ピアスとイヤリングの違いを説明しておく。両者ともに耳につけるアクセサリーであるが、イヤリングはバネ式のクリップで耳を「挟む」もの、ピアスは耳に開けた穴に棒形やフック形の装身具を「通す」ものである。イヤリングには身体変工が不要だが、着装時の圧迫感、見た目の重厚さ⁶、デザインのバラエティーの少なさ、落としやすさがデメリットである。ピアスは施術からの数カ月間に外傷による困難をとともうが、完治すると着装感がほとんどなく、外見がスマートで、デザインの自由度が高い⁷。

以上、子どもの身体彩色と身体変工は、学校段階が上がるにつれて各人が自身の「大人」の度合いを判断し、それに合わせて、あるいはそれを周囲に対して宣言する自己表現としておこなわれていた。化粧は着脱が簡単なために早期に取り入れられ、かつ就職活動に必要なドレスとして広く普及していた。身体変工についてはその施術行為が子どもにとっての魅力となっていたが、実際の開始は遅く、取り入れは一部にとどまっていた。

2-2 時間変化

本節では、個人に注目して身体彩色と身体変工の経時変化を示すため、子どもが身体装飾を開始し、これを環境とすり合わせていく過程に関する3つの事例を示す。これらは下島による聞き書きないしは自分史であり、最初の2事例は化粧史、3つめはピアス史である。

〈事例1〉化粧のしかたの時間変化 [下島 2017: 197 を筆者が編集]

A (20歳、キャバクラ勤務)は小学校6年生の頃、中学生向けのおしゃれ情報雑誌『nicola』(1997年一、新潮社)の読者モデルに憧れて化粧を始めた。しかし、思ったようにできなくて、中1になる頃には興味を失った。中2になると友だちが派手な子に変わり、カラーコンタクトレンズやつけまつげなどを中心に化粧を再開した。当時はただ周りを威嚇するような意味合いでド派手な化粧をしていた。中3になるとまた友だちが変わり、化粧をすることが少なくなり落ち着いた。

高校に入るとギャル雑誌『egg』(1995—2014年、大洋図書)の影響で、茶髪に濃い化粧をしてスカートを短くしているような「JK」(女子高生)を真似て、再び濃い化粧に目覚めた。でも中2の頃とは違って、自分に合うことを意識するようになった。学校にも化粧はバッチリしていったが、愛嬌と嘘で先生にばれないように工夫し、校則との正面衝突はうまく避けた。

高校卒業後には美容室に就職したので大人っぽい化粧を目指した。今は転職してキャバクラ勤務なので仕事柄、また濃い化粧に戻りつつある。

6 イヤリングの基本的な構造は、耳を挟むバネと耳たぶの厚さに対する微調整をおこなうネジからなるため、大ぶりでメカ的である。

7 ピアスの形状には、スタッド(ピン)状、フック状、リング状、チェーン状のものなどがある。安全ピンなどがアクセサリーとして着装されることもある。

Aの化粧には、雑誌やその読者モデルであるカリスマ的個人、学年ごとに変わる友だち、周囲を威嚇することでしか自分を確認できないような環境との関係、学校の教師というインタラクティブではあるが抑圧的な制度、そして職場といった多様な要素が関与しており、その様相と意味は時間とともに変化してきた。とくに中学在学時の化粧は、年ごとに変わる仲間集団に自分を位置づけて相互に同調し、それ以外の他者と差異化を図る手段として機能していた。しかし高校生になると、共同性よりも自身の顔と対話して化粧のしかたを工夫するような個人的側面がみられた。

日本の（大きな）学校では、12年間を通してほぼ毎年クラスが替わり、さらに中学や高校進学時には学校全体のメンバーが替わるため、子どもたちの社会関係もその枠組みの中で形成される。このため、化粧をするかどうかやそのしかたは4月から翌年3月までという学校年度を単位にめまぐるしく変化していた。

2つめに、幼少時からの肌のコンプレックスに対処するという強い動機をもって、学校や教師に抵抗しながら化粧を続けてきた例を示す。

〈事例2〉肌のコンプレックスと学校への抵抗〔下島 2017: 200 を筆者が編集〕

下島の目の下には稗粒種とよばれる白色の小さな粒がある。小学校の頃は稗粒種のことを言われるのがいやだった。そのことから中学入学後、夜ごとに母の化粧道具をあさって塗っていたところ、もう1つの悩みであった肌の赤みも消せることを知った。

高校に入ると校則は厳しかったが、みんなが化粧をしていた。下島も肌のコンプレックスを隠すため校則に抗って化粧を続けた。すると担任に目をつけられ、毎朝一人だけ化粧チェックをされることになってしまったが、化粧はやめず、化粧のしかたも変えず、先生目から逃れるよう努力した。放課後には、ギャル雑誌『Ranzuki』（1998—2016年、ぶんか社）などを参考に跳ね上げたアイラインにつけまつげ、キラキラのグロスという派手な化粧で遊びに出かけた。今思えば、禁止されていることをすることでスリルや楽しさを得ていた。

大学に入ると化粧を自由にできる立場になったが、化粧をするのが楽しいと感じる時期は通り過ぎていた。今は、ツイッターのメイク方法動画を参考に、自分の顔に似合う化粧を模索している。

下島は、肌のコンプレックスから化粧に興味をもち、化粧により劣等感を克服することで自信をつけた。中学、高校へと進学する過程では、化粧は自分の顔を理想の雑誌モデルに近づけるための手段、校則への抵抗を表現する手段、そして教師との交渉を楽しみながら関係を維持する手段となっていた。

化粧は個人でおこなう行為であるが、事例1・2からは、子どもたちの化粧が社会関係の中で生成されていることが指摘できる。とくに中学・高校での化粧は、模倣や同調、差異化や抵抗といった社会的な意味の強い行為として意味づけられる。

最後に、子どもたちが化粧よりも一層、大人らしさを読みこんでいるおしゃれの例とし

てピアッシングに注目し、その魅力とピアスを取りまく環境について検討する。

〈事例3〉大人に近づく競争とピアッシング [下島 2017: 200-201 を筆者が編集]

下島が初めてピアスホールを開けたのは高校1年生の夏だった。髪を染め、ピアスをしている『Ranzuki』誌のモデルのような「JK」になりたかった。ピアスを開けている友だちがあまりいなかったので、「みんなより先に開けてやる！」という競争心で開けた。

当時はバイトをしていなかったため、ピアッサー⁸を買うお金がもったいなくて、友達Bの母に安全ピンで開けてもらった。「右に開けるとホモになり、左に開けると運命が変わる」というジンクスを信じて、最初なので、左の耳たぶに1つだけ開けた。開けた直後は、痛いというよりも、少し大人に近づいたという気持ちで嬉しかった。

下島は、雑誌のモデルを理想像として、仲間たちとの大人へ近づく競争の中でピアッシングを決行した。呪術的な信念にもとづく部位選択は、身体を基盤とした、自身の生に対する祝福と解釈することができるだろう。この例は、ピアッシングの第一の意義が身体を変工することにあることを示している。

以上をまとめると、子どもの化粧の時間変化には、社会的な側面と個人的な側面があった。子どもたちは、毎年のクラス替えや小・中・高校という学校制度に枠づけられた仲間集団の中で、化粧という表現手段を用いて仲間との同調やそれ以外との差異化、教師とのコミュニケーションを図っていた。個人的な側面としては、子どもたちは成長していく過程で自身のコンプレックスに向きあうなど、自分らしい装身方法を探求していた。

3 身体変工をめぐる葛藤

3-1 外的／内的な抑制

本節では身体変工への抑制を外的要素と内的要素の2方向から検討する。

身体装飾への外的抑制としては、子どもは小・中・高校を通して学校からこれを抑制され、大学生になるとアルバイトや就職活動との関係で抑制される。アルバイト先の規範によるドレスの制限としては、飲食関係業務では衛生上の理由⁹で、また一部の事務職では社風等の理由でピアスやネイルアートを抑制されていた。

就職活動も大学生のおしゃれを抑制する要因となる。就職のための説明会・試験・面接

8 ピアッサーは身体に穴を開ける道具である。ピアッサーには「ファーストピアス」とよばれる、穿孔時に身体に挿入され、そのまま体内に残るピアスがセットされている。ファーストピアスは文字どおり、当該部位に最初に挿入されるピアスであり、金属アレルギーを生じにくい素材でできているが、傷口が完治したら他のピアスに差し替える。

9 厚生労働省が定める食品衛生法では、販売用の食品における「不衛生」や「異物の混入」の忌避が指示されている。

のドレスコードはスーツであり、ピアスや茶髪は自制される。ピアスは当日に装着しなければ穴は目立たないので問題ない。ふだん髪を「明るい色」(茶髪など)に染めている大学生は、就職活動を始めると髪を黒く染めることが多い。技術的には自身で前日に「黒染めスプレー」を噴霧して茶髪を黒くし、用事が終わったらシャンプーで洗うことで元の髪色に戻せるが、多くの大学生が美容院で本格的な黒染めをおこなう。これは、就職活動に適合的な黒色の染料を髪に浸透させる身体変工であり、就職内定への意志を表す身体表現であるといえるだろう。

次に、身体変工への内的な抑制について、これが家族との関係によって説明される例を示す。小・中・高校を通して化粧によって学校や教師への抵抗を楽しんできた子どもたちも、身体変工には自制をきかせていた。

〈事例4〉ピアッシングと家族 [下島 2017: 199-200 を筆者が編集]

下島は友だちの母親にピアッシングしてもらった。自分の母には事前に言うとは止められるかもしれないので言わなかった。だが、母が彼女のピアスをみつけた時に言ったのは「開けたんだ」の一言だった。

ゼミメンバーのSは友人にピアッサーでピアッシングしてもらった。実行前に母には相談していなかったが、後から兄にピアスをみつけられ、「怒られた」という。下島はこのエピソードを挙げて、Sが「家族から大切にされている」と述べている。

他のゼミメンバーには、親に事前に相談して合意に達した人がいれば、「開けるね」と一方的に伝えたり、後から発覚して怒られた人もいた。怒った母たちの言葉には、「ママが産んだ身体に何しているの」「あたしの許可なしに何やっているの」などがあった。母たちの怒りについて下島は、母にとって娘はいつまでも自分の子どもで、子どもに身体を勝手に傷つけられたくないのだろうと推察している。

化粧に関して下島は、教師に対しては抵抗という呼びかけをおこない、教師の注目をひいて毎日取り締まられることにいわば成功した。しかし、ピアスをめぐっては母から強い注目を得ることができなかった。筆者がその時の母の様子などをたずねても、下島は黙って話さず、代わりにSのケースを語った。そこで筆者は下島に、Sのエピソードと意味を卒業論文に書くように指示したところ、「家族から大切にされている」という解釈が書かれていた。

子どもはピアッシングという身体変工にさいしては、母からの抑止や¹⁰、いつまでも子どもであれという期待を内面化し、葛藤を抱えている。だが彼らは、自身が大人に近づいたと自覚した時にピアッシングを決行し、施術後に家族、とりわけ母から怒られることを期待する。弛緩した通過儀礼の中にある子どもにとって、ピアッシングに関する家族から

10 ゼミメンバーの母の年齢は40代前半～50代前半で、ピアッシングそのものに対する違和感は大きくない世代である [村澤・阿保 2001: 2, 4]。

の叱責は、予定された劇的なイベントなのである。このように、ピアスについては校則やアルバイト先の規則による禁止だけでなく、子どもたち自身の内面にある母との関係が抑止要因として働いていた。

続いて、身体変工の中でも日本ではおこなっている者が少ないタトゥーについて、子どもたちがこれに憧れながらも、欲望を自制してきた事例を2つ示す。

〈事例5〉ラッパーを通じたタトゥーへの憧れ [下島 2017: 201 を筆者が編集]

下島は高校に入ってまもなく、タトゥーに興味を持ち始めた。当時の彼氏の影響でラップ（音楽）を聴き始めたが、日本人女性ラッパー「MoNa a.k.a. Sad Girl」のCDジャケットに写った、彼女の背中に大胆に入れられたタトゥーがとてもカッコよかった。子どもを産んだらその子の名前を彫りたいと強く思っていた。

〈事例6〉タトゥーの延期 [下島 2017: 200 を筆者が編集]

Y (20歳、アパレル会社勤務) は小学4年生の時に歌手の安室奈美恵の腕のタトゥーに感化された。バラなどのタトゥー・シールをいつも貼っていたが、シールは剥がれると汚くて、タトゥーを入れたかった。しかし最近、タトゥーを入れていると、子どもが生まれても温泉にもプールにも一緒には入れないことを知った。今は、子どもが二十歳を越えて自立した後にタトゥーを入れたい。

子どもたちは、好きな歌手の身体に彫られたタトゥーを見て、自身の身体を歌手の身体的ふるまいに同調させることを希求し、タトゥーについて考えるだけで身もだえするような時間を送ってきた。それと同時に、タトゥーが秩序や規範からの逸脱のドレスであることを幼少時から感じとっていた。実際に、タトゥー・入れ墨のある身体は、反社会的集団と結びつけられたり、不衛生とみなされたりして、現時点の日本では温泉・銭湯・プールなどに入れないことが多い。

事例5・6の2人はタトゥーを実行することのメリットとデメリットについて長時間、そして長いタイムスパンで熟思して、実行を延期してきた。興味深いのは、ピアスが母との関係で抑制されていたのに対して、タトゥーに関する2事例は、将来産む予定の子どもと関係づけられている点である。タトゥーで子どもへの永遠の愛を表現しようとしたり、逆に、子どもとの生活における責任に鑑みてこれを延期したりしているのである。

以上から、子どもが身体変工に関する判断をおこなう時には、過去・現在・未来に渡る長期のスパンで身体による家族のつながりが想起され、とくに身体的に最もつながりが強い他者である母や子との関係が顕在化していることが指摘できる。さらにいえば、彼らの身体には、親にとっての娘の身体と、将来の子どもにとっての母の身体、という二重の他者性が付与されていた。身体変工は、このような身体的なつながりをもつ他者との関係の中で、デザインが想像されたり、実行が抑制されたりしていたのである。

3-2 ピアッシングのプロセス的困難

本節では、身体変工に関する身体的な困難について、ピアッシングを例として検討する。ピアスは、子どもの身体装飾史上最も遅くに出現する装身の1つである。子どもたちがピアッシングをしない理由には、穴を開けることへの恐怖心をはじめとして、ピアッシングから完治するまでの消毒などのわずらわしさ、金属アレルギー、アルバイト先での禁止などがある〔下島 2017: 198〕。

そもそもピアッシングとはどのような行為なのだろうか。狭義には尖ったモノで身体に穴を開けることを指す。しかし、広義にはピアスホール形成、すなわち穿孔した穴に異物を挿入して時間の経過を待ち、穴の周囲に皮膚を形成させる過程を意味する。狭義のピアッシングは一人でもできるが、親しい他者や医療機関のスタッフに施術してもらうことも多い¹¹。道具には、ピアッサー・安全ピン・ピアッシング用の針がある。ピアッサーは、「ファーストピアス」とよばれる金属ピアスをバネの力で身体に突き刺す道具であり、一瞬で穿孔がおこなわれる。安全ピンと針は手の力で身体に穴を開けるもので、ピアッサーよりも時間がかかる。

身体変工にともなう実存的な苦痛としては、これまで施術の瞬間が注目されてきたが、むしろ苦痛はその後の緩慢な治癒プロセスに宿ると筆者は考える。というのも、施術者や道具に関わらず、ピアスホール形成は自己治癒力に依存しており、傷が癒えるまでの過程は数カ月におよぶものである。穿孔という身体介入が実を結んでピアスホールが形成されるためには、ファーストピアスの周囲に皮膚ができるまで待つしかない。その間、消毒液を噴霧したり、化膿止めの薬を服薬したりすることはできるが、これらは、痒さ、痛み、体液の滲出、その匂い、そして分泌物がファーストピアスに固まりつくなどの不快を完全に止めることはできない。身体内部から滲出して開口部に留まる体液は、身体内外の境界、すなわち自身の輪郭を揺るがす危険性を帯びているが〔鷺田 2015: 47〕、そのような生の身体と向きあい、自身でケアしていくことがピアスホールを形成することなのである。その過程で、患部が雑菌感染して化膿したり、ファーストピアスに含まれる特定の金属に対して身体がアレルギーを起こしたりすることがあり、ピアスホール形成を諦める者もいる。穿孔後まもなくファーストピアスを外してしまえば、上述したような不快さは数日で消失し、やがて外見のくぼみもなくなる。

ピアスホールは、開けてから何年も経っても、疲労時や梅雨時などに痒みや体液が出るなどの不具合が起きることがある、いわば古傷である。これに対しては、しばらくピアスを装着しなければ改善する。他方で、1～2カ月間ピアスを装着しないとピアスホールに薄皮ができることもあるが、耳たぶを伸ばして棒形のピアスで薄皮を破れば戻る。このようにピアッシングは、開ける瞬間に自身を傷つけるといった象徴的な介入にとどまらず、

11 本特集の彭宇潔論文では、タトゥーの施術はグルーミングに似て、彫る人と彫られる人の触れあいにより進行することが指摘されている。これに対して鷺田は、現代人が身体接触の気持ちよさを忘れ、医療機関等に身体の管理を任せようになった過程を「身体のもつ社会性の消失」とよんでいる〔鷺田 2015: 54-55〕。

表2 流行歌の歌詞に表現される身体装飾

身体への介入	着装物・装身行為の例	合計 (曲)	割合 (%)
着装	アクセサリー	1811	29.4
彩色	化粧とネイルアート	3520	57.1
変工	毛染め・ピアス・タトゥー	838	13.6
合計		6169	100

一生、自身のピアスホールのお世話をし、自身の身体をケアしていくおしゃれなのである。身体変工は、身体を文化化するものであると同時に身体其自然性を露呈するものでもある。

4 社会における身体装飾

4-1 流行歌に歌われる身体装飾

本節では流行歌の中で身体装飾がどのように表現されているのかを検討する。流行歌は日本社会全体の身体装飾に関する風俗を反映していると考えられ、とくに子どものおしゃれは好きな歌手の音楽的パフォーマンス、身体的ふるまい、そして発言などから多面的に影響を受けていた。

日本語流行歌の総合的歌詞検索データベースは約10個あるが(2017年2月現在)、本論では、登録曲数が最も多いデータベースの1つである「Uta-Net」を使用し、2017年2月20日～3月6日に調査をおこなった。Uta-Netには1960年代以降に発表されたJ-POP・歌謡曲・演歌・アニメソング・童謡・唱歌などが、22万曲以上収録されている¹²。

流行歌の歌詞に登場する身体装飾を、表1の分類に依拠して、アクセサリーの着装・身体彩色・身体変工の3つに分け、その頻度を表2に示した¹³。アクセサリーの着装を表す楽曲は、イヤリング・ネックレス・ペンダント・ブレスレット・アンクレット・指輪¹⁴・トゥリングの7種類のいずれかが歌詞に含まれるものとした。身体彩色を表す楽曲は、化粧¹⁵・ファンデ(ーション)・口紅・グロス・ルージュ・マスカラ・アイシャドー・アイライナー・ネイル(アート)・マニキュアの10種類が含まれるもの、身体変工を表す楽曲

12 Uta-Netで歌詞が検索できるのは、JASRACをはじめ各著作権管理団体が管理している日本の楽曲の一部である。本データベースには毎月約2000曲が追加されている。

13 1つの楽曲に同じ着装物が複数回登場した場合は1回、複数種類の着装物が登場した場合は種類ごとに1回と数えた。なお、本データベースでは同一楽曲を異なるアーティストが歌った場合には別の曲とカウントされる。

14 「リング」を含む楽曲(1889曲)には、別の意味の語(イヤリング、ケーティングなど)が多く含まれることから、リングを調査に含めなかった。

15 「メイク」を含む楽曲(862曲)には、別の意味の語(リメイク、メイク・ラブなど)が含まれることから、メイクを調査に含めなかった。

は、ピアス (pierce)・ピアッシング (piercing)・茶髪・金髪・タトゥー (tattoo)・刺青・入れ墨の7種類が含まれるものとした。

結果としては、身体装飾を歌詞に含む楽曲は全22万曲中の2.8% (6169曲)であった。内訳としては、化粧などの身体彩色が約57.1%と圧倒的に多かった。アクセサリーの着装を歌った曲は29.4%、ピアスやタトゥーなどの身体変工は13.6%と、両方を合わせても4割強にとどまった。このことから、身体彩色が最も日本社会と親和性が高く、次にアクセサリーの着装が続くが、身体変工は社会との関係が疎であるといえる。

4-2 流行歌に歌われる身体変工

本節では、流行歌において出現頻度が少なく、また、子どもがその実行に葛藤を抱える身体変工 (ピアスとタトゥー) について、これが歌われる文脈を分析する。

最初に、ピアスをイヤリングと比較する。ピアスまたはイヤリングが歌われている流行歌は691曲あり、そのうちピアスが81.5%、イヤリングが18.5%を占めていた。ピアスの出現頻度はイヤリングの4.4倍に上り、流行歌ではピアスが圧倒的にメジャーであるといえる。ピアスの着装部位には、耳に加えて舌・へそ・爪があり、「ピアスの穴」といった身体介入部分や、「ピアッシング」という行為も歌われていた。

ピアスやイヤリングの使われ方に注目すると、両者ともに「着け/つけ」る文脈は少なく (合計8曲)、逆に「外/はず」す文脈がイヤリングで33曲、ピアスで42曲と格段に多く、イヤリング・ピアスの合計では9.4倍 (75曲) に上った。たとえば、18アーティストに歌われた「シルエット・ロマンス」 (作詞: 来生えつこ、作曲: 来生たかお) では「無意識にイヤリング 気づいたらはずしてた 重なりあうシルエット」と、イヤリングを外すことが性行為開始のサインとして表象されている。「外/はず」すに近い文脈として、「落とす」があるが、恋人男性の家や自動車内に見知らぬピアスが落ちてると、それは浮気を暗示するものとして歌われていた。なお、ピアスに固有の文脈としては、新しい穴を「開け」ることが、新しい恋や生き方の開始を象徴していた。

第二に、とくに歌手の身体から子どもが大きな影響を受けていたタトゥーに目を向けた。タトゥー (tattoo、刺青、入れ墨) を歌った楽曲は、身体装飾を歌った楽曲中の2.9% (177曲) と少なかった。タトゥーが歌われる文脈は、本物のタトゥー、シールやサインペンによる偽物のタトゥー、心などに刻む比喩としてのタトゥー、の3つに分けられた。比喩としてのタトゥーは、「心にタトゥー入れたように」「無意識に刻まれてゆく経験のタトゥー」など、他者との関係や経験を着脱不能なものとして自己の身体および精神に刻みこむことを表現するものであった。

物質的側面に注目すると、彫られた部位には腕・腰・胸・首・肩・手・太もも・体全体に無数、があった。絵柄はアゲハ (蝶)・星・ドクロ・蛇・バラ・微笑むマリア・キミ (お前) の名前など、西欧の柄が中心であった。社会関係に注目すると、他者のタトゥーを見るという行為や視線、恋人という限定された他者に捧げるための (相手の名前など) タトゥーであることの言表、仲間とともに自身の身体にもタトゥーがあるという連帯、が表現されていた。音楽ジャンルとしてはラップがタトゥーとの親和性が高かった。ラップ

は押韻する詩を特徴とするが、「タトゥー」を「タブー」と組み合わせる韻踏みが複数あり、タトゥーを逸脱的なものとみなす解釈が示唆されていた。

以上から、身体変工を歌った流行歌は多くはなかったが、ピアスの出現頻度はイヤリングを凌駕していた。ピアス・イヤリングに関しては、これを外すことや落とすことが注目されていた。タトゥーについては、子どもたちが彫ってみたいと語る図柄や部位が仔細に表現されていたが、タブーや比喻として扱う楽曲もみられ、これらはタトゥーをめぐる葛藤を抱える子どもたちの気持ちに寄り添うものであると推察される。

4-3 アクセサリー着脱の意味

本節では、ピアス・イヤリングを着脱することの意味を実例に即して検討する。

筆者は女性であるが、女性が2人でカフェ等で長話をする時、アクセサリーを次々と外していく者がいる。また、女性どうしてホテルに泊まると、部屋に入るなりアクセサリーを外す者もいる。彼女たちはアクセサリーを外すことで心身の束縛を解いていると考えられる¹⁶。おしゃれには多かれ少なかれ締めつけ感や動きにくさなどがともなうが、アクセサリーは外しても社会生活に問題が生じにくく、物質的にも社会的にも最も出先で着脱しやすいドレスである。

以下に、アクセサリーを着けたり外したりする行為が、社会人という役割を着脱することとして意味づけられている例を示す。

〈事例7〉社会人性の武装と解除

T (38歳、会社員) は、帰宅するとすべてのアクセサリーと時計を外す。そして朝、出かける時にこれらを1つ1つ装着する。金属製の装身具を着けていく時、自分を武装するような気持ちになる。武士が鎧のパーツを順に身につけると似ているかもしれない。

Tにとってアクセサリーを着けることは、「武装」や「武士の鎧」という言葉に象徴されるように、会社という公的領域に向かうために身体を社会仕様に作りあげていくことである。金属製のアクセサリーは、その素材の特質により、自然的な身体を補強して文化的で人工的なものに改変するためのアイテムとして想像しやすいのだろう。

一方で、Tは帰宅するとすべての金属製の着装物を外し、自宅ではアクセサリーなしで過ごす。彼女にとってアクセサリーを外すことは武装を解除することであり、家内的領域にふさわしい身体を取り戻すことである。社会人性や公的な自分といった役割は、アクセサリーというモノと一緒に自身から取り外すことができるものと認識されているのである。

以上から、大人の女性がアクセサリーを外すのは、自身の身体を一時的に「より自然に

16 ひとつのアクセサリーを一度着装したら数カ月つけっぱなしで過ごす女性もいる。

近い（と自身が認識している）姿」に近づけることであるといえるだろう。彼女たちはカフェという限定的な時空間において、アクセサリを外すことで自身の身体を家内的なものにし、席を立つ時にアクセサリを着装することで公的領域向きの身体に戻す。これは、「今ここ」が公的／家内的領域であることを、ドレスによって自他に宣言することであるともいえるだろう。

5 審美性に関わる規範・流行・便宜

本論では、身体装飾（アクセサリの着装・身体彩色・身体変工）を広く対象とし、第一に日本の子どもがこれを始める過程、第二にそこで直面する葛藤、第三に社会と身体装飾との関係について記述してきた。

第一の子どもの身体装飾の開始については、現代日本の子どもの身体装飾は学校という制度の中で、子どもが大人に近づいたことを宣言するドレスとして、化粧を端緒としておこなわれていた。子どもの身体装飾は、クラス替えによって学校年度ごとに組み変わる子どもの社会関係の中で作られており、個人の装飾傾向は毎年変化していた。ここに、アンケート調査ではわからなかった子ども個人の身体装飾の通時的変化が示された。

第二に葛藤である。身体装飾の欲求は外的・内的な規範等により抑制され、自己表現としての身体装飾は環境とすり合わされていた。外的抑制としては、学校の生徒は校則で制服が定められ、原則として身体装飾は禁止されていた。一部の職場等ではピアス・茶髪・入れ墨などが不衛生ないしは非社会的なドレスとして禁止あるいは抑制されていた。内的な抑制は、儒教的な信念を基盤とし、身体的なつながりの強い他者との関係性や自己の身体の実存性と向きあう過程で生じていた。これまでの研究は身体の実存性の観点から身体変工を論じるさいに、施術の瞬間の苦痛や快楽に注目してきたが、本論では施術による外傷が治癒するまでの自然的でプロセス的な苦痛を明らかにした。

第三の社会と身体装飾との関係については、流行歌の歌詞分析の結果、日本社会に最も親和的なのは身体彩色であることが示されたものの、ピアスやタトゥーに関しても詳細な描写がなされ、豊かな意味の世界が表現されていた。大人の身体装飾には、アクセサリ等を着装することで自身の身体を公的なものにしたたり、これを外すことで家内的なものに転換したりする、モードのスイッチング装置としての使い方が見られた。

以上の知見をふまえて、以下では、身体装飾に関わる審美性がどのように実現されているのかを、規範・流行・便宜の3点に注目して検討する。

子どもの身体装飾は校則により抑制されていたが、大人の身体装飾には規範は存在するといえるが、往々にして非明示的で、状況依存的である。学校には、子どもの身体を経済・社会に組みこむための規律訓練をおこなう権力の方法という側面があり [フーコー 1986: 178]、ドレスに関しても参照すべきコードが存在することを教え、かつ子どもがコードに従順に対応する方法を修得させる場であるといえるだろう。実際には、校則は生徒のドレスのすべてを定めているわけではなく、子どもは長い学校期間を通して、身体装飾の何が禁止され、何が見逃され、何が期待されるのかを、その時々環境において関係

する他者と交渉しながら学ぶ。教師への抵抗や服従とともに、仲間どうしで装飾の方向や程度を調整することも重要である。身体装飾に関する「実質的な規範」は、諸個人が直面する具体的な状況や社会関係の中で輪郭を顕し、時間とともに変化するものなのである¹⁷。すなわち、身体装飾において目指される審美性とは、各個人が自身の属する集団メンバーとすり合わせをおこないながら、「実質的な規範」の範囲内で自身のドレスを差異化し、また流行にのることであるといえる。

身体にも流行がある。目の印象をどのようにするかといった特定の身体部位の見せ方に関する流行があると同時に、身体のどの部位の加工に力を入れるべきかも時代により変化し、流行の対象となっている [栗田 2016]。身体は人により多様であり、その上、身体に関する審美的な評価は本人の好みとともに、流行という社会現象に枠づけられている。つまり、身体装飾は自然な身体を文化化するとともに、個別的で多様な身体を流行の身体に補正する技術であるといえるだろう。

最後に、便宜性の視点から身体変工の価値を見直したい。身体への介入の結果が長期的、半永久的に保たれる身体変工は、身体の審美性を効率的に達成するための実利的な手段ともなっているのである。身体装飾については、これをおこなうプロセスが好きな者もいるが、結果を重視して作業を簡略化したい者もいる。身体の補正や加工は手間と時間のかかる毎日の繰り返しである上に、体調等によっては必ずしも希望どおりに仕上がるとは限らない。そこで、身体の一部を変工してしまえば、以後はその部分に対する介入が省け、効率的かつ安定的に身体の審美性を達成できる。たとえば、眉毛にタトゥー（アートメイク）を入れると、眉を抜いたり、剃ったり、描いたりする作業が省け、常に好みの眉を実現できる¹⁸。このような、審美性と便宜性を併せて追求する身体変工として注目されているのは他に、パーマメントカール、ストレートパーマ、まつげパーマ、永久脱毛などがあり、その究極が美容整形といえるだろう。本特集の独創性は審美性への着眼にあり、それは田中雅一がワークショップ当日のディスカッションで指摘したように、民族衣装の分野でもファッションの理論でも言及されることがなかった、身体を記号として扱う立場を乗り越えようとする視角である。従来のファッション論はある程度の苦痛を前提とし、本特集の序章では審美性と快樂の親和性を強調するが、本稿は、それらに加えて便宜の観点から審美性に迫る試みである。

なお、現代の身体変工は何度でもやり直しがきく。それは何よりも、通過儀礼の意味がないからである。身体変工は民族や村落などに規定された一生不変の集団の印 [ファン・ヘネップ 2012: 101] ではなくなり、個人的な嗜好や一時的に形成された仲間集団との連

17 民族衣装の輪郭、つまりドレスで表現される民族の境界についても同様のことがいえる。宮脇は、民族衣装における特定の民族らしさの維持・構築が、個々の着用者が自身のドレスを周囲に合わせていく実践に支えられていると述べている [宮脇 2017: 256, 264, 266]。

18 アートメイクは彫り師ではなく、美容外科や美容皮膚科などの医師がおこなう医療行為である。山本芳美は近年の変化について、彫り師はこれまで厚生労働省をはじめとする公権力と距離を保ってきたが、アートメイクの事故等を契機としてタトゥー全般が医療の領域に取りこまれつつある状態であると指摘する [山本 2016]。なお、眉毛タトゥーのある者も、原則としては温浴・水浴施設への入場を断られる。

帯を表現するもの、そして選び直せる印になった。施術技術も向上しており、タトゥーもレーザー治療で消すことができる¹⁹。身体変工は、これを経験することで何かかがらりと変わるような共同的で社会的な「意味」から解放されたのである。

人びとは環境とのすり合わせにより社会適応的な装身の輪郭を探り、その範囲内で他者との差異化を図ったり、流行に同調したりすることをおしゃれとして楽しんでいるといえる。同時に、身体変工には逸脱を含む多様な意味づけがなされていたが、身体の審美的価値を効率的に高めるために、身体変工の実利性、便宜性が評価される側面もみいだされた。

<参考文献>

- 朝日新聞 2015 「タトゥー 医業か芸術か」『朝日新聞』2015年11月22日。
- エプシュタイン、ジュディット 1986 (1977) 「対角線」浜名優美訳、今村仁司監修 『TRAVERSES / 1 化粧』リブレポート、pp.296-313。
- 大澤真幸 2013 『生権力の思想』筑摩書房。
- 小川了 2013 (1991) 「大人と子供——通過儀礼」米山俊直・谷泰編 『文化人類学を学ぶ 人のために』世界思想社、pp.167-180。
- 風戸真理 2010 「モンゴル牧畜社会における銀製品——その経済的な価値と文化的な価値」Kyoto Working Papers on Area Studies, No. 87, JSPS Global COE Program Series 85 In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa、pp.1-16。
- 金愛慶 2006 「日本の若者におけるピアッシング行為に関する一考察——自傷行為との関連性を中心に——」『白梅学園大学・短期大学紀要』42: 13-28。
- 栗田宣義 2016 「メイクの社会学序説試論：若年層女性における利用コスメの優先順位」『甲南大学紀要 文学編』166: 79-86。
- 清水昭俊 1989 「序説——家族の自然と文化」清水昭俊編 『家族の自然と文化』弘文堂、pp.9-60。
- 下島里緒 2017 「肌の装飾人生——若者はどうオシャレを利用しているのか——」『2016年度 生活創造学科成果集』北星学園大学短期大学部、pp.196-200。
- ジンメル、ゲオルク 1994 (1911) 「流行」『ジンメル著作集7 文化の哲学』圓子修平・大久保 健治訳、白水社。
- 関昭郎 2008 「戦後・平成から現代」露木宏編 『カラー版・日本装身具史——ジュエリーとアクセサリーの歩み』美術出版社、pp.140-152。
- 武内義雄・坂本良太郎訳注（曾子著）1988 (1940) 『孝経・曾子』岩波書店。
- 田中芳伸 2016 「近時の労働判例 第39回大阪高裁平成27年10月15日判決（入れ墨調査事件）」『LIBRA』2016年4月号：50-51。
- 露木宏 2008 「飛鳥・奈良時代」露木宏編 『カラー版・日本装身具史——ジュエリーとアクセサリーの歩み』美術出版社、pp.32-50。

19 現時点ではレーザー治療によるタトゥーの消去は不完全な技術であるが、今後、変わる可能性もある。

- 露木宏 2011 「銀を纏う人々」 露木宏・村上隆・飯野一郎・道明三保子・原典生・芳賀日向・向後紀代美・加藤定子・鶴岡真弓著『聖なる銀』INAX 出版、pp.6-14。
- 中村香子 2000 「北ケニアの牧畜民サンプルの身体装飾と年齢体系：サブカルチャー化するビーズと戦士」『生態人類学会ニューズレター』6: 6-7。
- 彭宇潔 2017 「『女性のファッション』——バカ・ピグミーの刺青実践を事例に」『コンタクト・ゾーン』9: 331-346。
- 橋本令子・内藤章江 2007 「若者のアクセサリーに対する意識とファッションとの関係」『椋山女学園大学研究論集』38: 171-181。
- ファン・ヘネップ、アルノルト 2012 (1909) 『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳、岩波書店。
- 深田博己・梶本あゆみ 2014 「女性の化粧に及ぼすコミュニケーション不安の影響」『対人コミュニケーション研究』2: 49-63。
- フーコー、ミシェル 1986 (1976) 『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳、新潮社。
- 宮脇千絵 2017 『装いの民族誌 中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社。
- 村澤博人・阿保真由美 2001 『アンケートにみる過去 10 年間のピアス着用率の変化「おしゃれ白書 1991-2000」より』ポラ文化研究所。
- 百瀬響 2008 『文明開化 失われた風俗』吉川弘文館。
- 雪村まゆみ 2005 「現代日本におけるピアスの普及過程——新聞および雑誌記事のフレーム分析——」『奈良女子大学社会学論集』12: 139-157。
- ロス、ロバート 2016 (2008) 『洋服を着る近代』平田雅博訳、法政大学出版局。
- 鷺田清一 2015 (1998) 『悲鳴をあげる身体』PHP 研究所。

インターネット資料

Uta-Net (歌詞検索サービス 歌ネット)

<http://www.uta-net.com> 2017 年 2 月 20 日～3 月 6 日閲覧。

文部科学省 2017 「学校基本調査——平成 29 年度結果の概要——(初等中等教育機関、専修学校・各種学校)」『文部科学省ホームページ』http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/08/03/1388639_2.pdf 2017 年 3 月 6 日閲覧。

山本芳美 2016 「日本の彫師はいつから認められてきたのか」『SYNODOS』(2016 年 6 月 17 日発表) 2017 年 7 月 13 日 閲覧。

Negotiation among Children, Adults, and Society on Body Decorations

Mari KAZATO

Keywords: body decoration, mutilation, children, aesthetics, norms

This paper focuses on body decorations that are superior in aesthetic functions among dress and describes the chronological process of the Japanese female children's body decorations, conflicts they face in that process, and the relationship between adult women's body decorations and society. Then, it discusses how children, adults, and society negotiate on body decorations and how social norms, fashion, and convenience are related to aesthetic values. Body decorations were classified into accessories, body painting (makeup) and mutilation (piercing and tattooing).

As for the results, firstly, children started to decorate their body during their school years with makeup. Besides aesthetic and amusement, their makeup had social meanings, such as resisting school regulations, negotiating with teachers, sympathizing with friends, and differentiating themselves from others. Secondly, body decorations were restrained in schools, part-time work places, the job-hunting process, and the relationship with parents. In other words, children had conflicts with external regulations, internal norms, and physical difficulties, especially with mutilation. Thirdly, about adult women's body decorations, based on the analysis of popular song lyrics, makeup was the most suitable to Japanese society, though tattoos and pierced earrings were attractively expressed in songs. In addition, as the behavior of taking off accessories represented the body with a private intimacy, accessories were used as tools to switch between public and private modes by taking them on and off.

After examining the relationships among norms, fashion, and convenience in regard to bodily decoration, the following can be concluded from the viewpoint of aesthetics. People searched the outline of suitable dress through negotiation with their environment to enjoy differentiating themselves from others and to catch up with fashion. Mutilation, for which multiple meanings, including deviation, were given, was evaluated by its profitability and convenience to efficiently increase the aesthetic values of their body.